

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 4 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770266

研究課題名(和文) 西北インドにおける仏教文化の展開過程に関する考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological Research on Developmental Process of Buddhist Culture in the North-western Indian Subcontinent

研究代表者

内記 理 (NAIKI, Satoshi)

京都大学・文化財総合研究センター・助教

研究者番号：90726233

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究により、ガンダーラ彫刻の制作時期に関する情報が収集された。ガンダーラ彫刻の制作時期について、考古学的な情報から考察した結果、ガンダーラ彫刻がつけられていた期間中における大きな画期が3世紀前半頃に求められることが判明した。
なお、これまでの研究成果は、博士論文として執筆し、2014年度に京都大学に提出した。また、博士論文は『ガンダーラ彫刻と仏教』として、2015年度に京都大学学術出版会より出版された。この著書は、第6回三島海雲学術賞に選定され、高い評価を受けている。

研究成果の概要(英文)：This Research focuses on the chronology of Gandharan Sculptures made in the north-western Indian Subcontinent in ancient times. By analyzing stylistic features of Gandharan sculptures based on archaeological information obtained in excavations which have been conducted so far there, we can get chronological benchmarks for the stylistic features. As a conclusion, there seems to have been a large alteration in Gandharan sculptures in the first half of the 3rd century CE.

研究分野：ガンダーラの考古学

キーワード：西北インド ガンダーラ 考古学

1. 研究開始当初の背景

ガンダーラ美術で有名な古代の西北インド(古代のガンダーラ地方とその周辺。現在のパキスタンのペシャール盆地とその周辺。)における仏教文化がどのようなものであったかは、実はそれほど明確になっていない。その原因はどこにあるかという点、同地の仏教文化の研究が、制作された時期のわからないガンダーラ彫刻を主な分析資料として用いて、進められてきたためである。

西北インドに仏教が伝播したのは、マウリヤ朝のアショーカの時代、つまり、紀元前3世紀の中頃と考えられる。そして、仏教文化は同地で紀元後6世紀半ば頃まで盛んにおこなわれたと考えられる。つまり、期間にして800年ほどの間、西北インドでは仏教文化が栄えたのである。これほどの長い期間おこなわれた仏教文化を、制作時期のわからないガンダーラ彫刻を用いて理解することは、無理である。

それでは、西北インドの仏教文化の研究は、どのように進められるべきであろうか。文献資料があらたにみつかって研究が進められているとはいえ、その数量は十分ではない。やはり、西北インドの仏教文化の検討は、ガンダーラ彫刻をはじめとする物質文化を用いて、つまり、考古学資料を用いて、進められるほかない。

西北インドの仏教文化を理解するためには、まず、ガンダーラ彫刻の制作時期を整理しておく必要があるのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、西北インドの仏教文化を理解するために、その基礎的な作業として、ガンダーラ彫刻の制作時期を考察することである。制作時期の明確なガンダーラ彫刻が増えれば、それだけ西北インドの仏教文化がどのようなものであったかがわかる。つまり、どの時代にどのような表現方法で、あるいはどのような技法をもって彫刻がつけられたかが整理されれば、それによって多くのガンダーラ彫刻の制作時期が推定できるようになる。その上で、それらの時期の推定された彫刻にどのような図像や題材が描かれたかを検討すれば、800年間栄えた西北インドの仏教文化の、時代ごとの特徴が明らかになるのである。

これらの一連の検討をすべておこなうためには、多大な時間と労力が必要である。そこで、本研究では、その基礎的な作業となる、彫刻の制作時期の考察と、その彫刻がつけられた時代的な背景の考察に、目的を絞って検討をおこなった。

3. 研究の方法

本研究で主に用いたのは、考古学的な研究方法である。つまり、物質文化を分析対象として、考古学的方法論に基づいて、検討をおこなった。考古学には、層位を用いた研究

方法がある。下位の文化層からみつかった遺物資料は、上位の文化層からみつかったものよりも古い、とする研究方法である。ここでは、この研究方法を用い、どの文化層からみつかったかが明確なガンダーラ彫刻を分析することにより、時代ごとのガンダーラ彫刻の特徴を求めた。そして、文化層出土のものではない場合でも、建物と彫刻の関係を考えることによって、彫刻の年代が考察できることがある。西北インドにおいては、建物は時代ごとに積み重なるようにしてつくられることがあり、そこには痕跡が残されるためである。このように、層位、あるいは建物との関係に注意して、ガンダーラ彫刻の検討を進めることにより、彫刻が制作された時期を考察することが可能である。

また、本研究では、ガンダーラ彫刻だけでなく、遺跡からみつかった土器などの他の遺物資料や、遺跡で検出された遺構などにも着目した。それらが、ガンダーラ彫刻の制作された時代背景を考える上で重要であるためである。

4. 研究成果

本研究課題における研究成果には、以下のようなものがある。

(1) ウッディヤーナ地方出土のガンダーラ彫刻の時代ごとの様式的特徴

ガンダーラ地方の北方にある、ウッディヤーナ地方から出土したガンダーラ彫刻の、時代ごとの表現方法の違いを整理した。同地域は、1956年からイタリアの調査隊によって集中的に調査がおこなわれてきた。彼らがこれまでに発掘調査した遺跡のうち、プトカラ第1遺跡、サイドウ・シャリフ第1遺跡、ピール・コート・グワンダイ遺跡の3つの遺跡を取り上げ、それらの遺跡の調査成果の中から、彫刻の年代にかかわる情報を抜きだした。プトカラ第1遺跡の調査成果からは、ウッディヤーナ地方においては、紀元後1世紀前半頃にはガンダーラ彫刻がつけられていたことがわかる。その頃の彫刻の表現方法は、ぎこちない。ぎこちない表現方法は、サイドウ・シャリフ第1遺跡で1世紀の半ば頃につけられたストゥーパを飾った彫刻に引き継がれる。

彫刻の表現方法に大きな変化が起こるのは紀元後3世紀頃のことと思われる。ピール・コート・グワンダイ遺跡のトレンチBK64-5において、3世紀頃の文化層と考えられる層位から出土した彫刻が、その変化の指標となる。それらの彫刻の衣文は二重平行線によって表されるもので、それまで丁寧な彫られていた衣文が、省略されるようになった結果現れた表現方法であろうと考えられる。

なお、ぎこちない表現の彫刻がつけられた時期と、定型化した表現の彫刻がつけられた時期の間には、写実的な表現で彫刻がつけられた時期が存在したようであるが、それが正確にいつ頃のことであったかは、発掘の情報

からは得られていない。

(2) ガンダーラ地方出土のガンダーラ彫刻の時代ごとの様式的特徴

ウッディヤーナ地方から出土した彫刻を対象としておこなった分析を、ガンダーラ地方から出土した彫刻に対してもおこなった。

京都大学が 1980 年代を中心とした時期に発掘調査したラニガト遺跡の調査データから、ガンダーラ地方においても紀元後 1 世紀後半頃の段階で、すでに彫刻がつけられるようになっていたと考えられる。主塔の中でみつけた基核小塔と呼ばれるストゥーパが建てられた 1 世紀後半頃につくられたと考えられる彫刻がみついているためである。それらの彫刻の表現をみると、そこにはぎこちなさが目立つ。ウッディヤーナ地方と同様に、ガンダーラ地方においても、ぎこちない表現の彫刻が最初につくられていたことがわかる。

なお、このようなぎこちない表現方法でつくられた彫刻は、タキシラ地方においてもみついている。それは、シルカップ遺跡でみつかった、紀元後 1 世紀半ば頃のものと考えられる片岩でつくられた彫刻群である。タキシラ地方では、片岩が産出されないため、これらの片岩彫刻はガンダーラ地方から持ち込まれたものと考えられている。これらタキシラ地方でみつかった彫刻の存在は、ガンダーラ地方で紀元後 1 世紀にすでに彫刻がつけられはじめていたことを裏付ける。

ガンダーラ地方においては、3 世紀前半頃に表現方法に大きな変化があったようである。ウッディヤーナ地方における変化と同様に、そこには表現の省略化がみられる。やはり、ガンダーラ地方においても、二重平行線による衣文表現がみとめられるのである。そして、3 世紀前半頃以前の段階において、写実的な表現をもつ彫刻がつけられていた点も、ウッディヤーナ地方の状況と一致する。

(3) 紀年銘彫刻の制作時期

これまでに 5 点知られてきた紀年銘をもつ彫刻について、上記の検討で明らかになった時代ごとの様式的特徴をふまえた議論をおこなった。

まず、5 点の紀年銘彫刻はそれらの様式的特徴から、スカーラー・デリー遺跡出土彫刻、パーラートゥー・デリー遺跡出土彫刻、ママーネ・デリー遺跡出土彫刻、出土地不明三尊像、ローリヤン・タンガイ遺跡出土彫刻、の順につくられたと考えられる。

その上で、刻まれた年数をどのような暦法を用いて数えるかについての検討をおこなった。紀年銘彫刻に用いられたであろう暦法は、彫刻以外の紀年銘資料を取り上げることにより判明する。クシャーン朝時代前後の西北インドにおいては、インド・グreek王国時代の王であるアゼス 1 世が創始させたアゼス紀元が、多くの紀年銘資料で用いられてい

る。そこで、紀年銘彫刻に刻まれる年数を、紀元前 47 / 6 年にはじまるアゼス紀元に当てはめ、5 点の彫刻が、紀元後 132 / 133 年、237 / 238 年、242 / 243 年、258 / 259 年、271 / 272 年に、それぞれつくられた、と結論づけた。

(4) チャナカ・デリー遺跡出土の土器の予備的考察

京都大学が 1960 年代を中心とした時期に発掘調査した、チャナカ・デリー遺跡から出土した土器を分析した。本研究で予備的に分析した資料は、出土層位が明確に記録されている資料である。それらの層位資料を用いることにより、チャナカ・デリーがどのような歴史をたどったかを知ることができる。

土器の分析の結果、チャナカ・デリーには、紀元後 1 世紀後半以前のある段階で王宮と思われる堅固な建物が建設され、それが紀元後 200 年頃に大地震によって崩落するまでの間、使用されたことが判明した。その後、断続的に 9 世紀以降のある段階までは、この土地は一般的な居住地として用いられたようである。

(5) 海外調査の実施

本研究期間中においては、平成 27 年度にパキスタン現地へ渡航した。タキシラ地方やハザーラ地方、インダス上流地域の遺跡の踏査や、博物館における遺物の調査をおこなった。

また、平成 29 年度には、インドに渡航し、デリーの国立博物館、チャンディガルの政府博物館、コルカタのインド博物館などをまわり、ガンダーラ彫刻の調査をおこなった。同時に、パンジャブ州のサンゴール遺跡や、マトゥラー市内および近郊の遺跡(ソク遺跡など)をまわり、クシャーン朝時代の遺跡の踏査をおこなった。

そして、平成 28 年度と平成 29 年度には、イギリスへの渡航時に、ロンドンの大英博物館とヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、オクスフォードのアシュモレアン博物館、エディンバラのスコットランド国立博物館などを訪問し、ガンダーラ彫刻の調査をおこなった。

さらに、京都大学人文科学研究所の稲本泰生准教授が指揮する海外調査(平成 26 年度のインド北部の仏教遺跡の調査、平成 27 年度の中国四川省の仏教石窟の調査、平成 28 年度の中国甘粛省東部の仏教石窟の調査)にも参加させていただき、広く仏教遺跡を踏査する機会を得た(科学研究費基盤研究(B)「東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態」研究課題/領域番号:25284030 および「東アジア美術における仏伝の表象」研究課題/領域番号 16H03372)。

(6) 成果の出版

本研究期間中には、平成 26 年度に博士論

文を執筆し、京都大学大学院文学研究科に提出した。また、その内容を改訂したものを、平成 27 年度に、『ガンダーラ彫刻と仏教』として、京都大学学術出版会より出版した。これらの博士論文や出版した著書には、本研究課題による研究成果も多大に盛り込まれている。著書はその後、高い評価を得、本研究の最終年度にあたる平成 29 年度に、「第 6 回三島海雲学術賞」に選定された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

1. 内記 理 2015 「ガンダーラ地方チャナカ・デリーの丘の歴史」『東方学報』第 90 冊 pp. 243-276 (査読あり)

[学会発表](計 11 件)

1. Satoshi NAIKI 2018 ‘Similarities and Differences in Gandharan Sculptures among Regions.’ Gandhara Connections Workshop “The Geography of Gandharan Art.” 2018 年 3 月 22 日 Classical Art Research Centre, University of Oxford, Oxford, United Kingdom.

2. Satoshi NAIKI 2018 ‘Geographical Differences in Material Cultures in North-west India.’ International Workshop on Pre-Modern Kashmir 2018, 2018 年 3 月 5 日 京都大学ユーラシア文化研究センター(京都府京都市)

3. 内記 理 2017 「ガンダーラ地方出土浮彫画像帯にみる仏伝画像変容の諸段階」研究会「東アジア美術における仏伝の表象」第 3 回ワークショップ 2017 年 12 月 23 日 京都大学人文科学研究所(京都府京都市)

4. 内記 理 2017 「ガンダーラ地方仏教寺院遺跡出土浮彫画像帯の組合せについて」日本オリエント学会第 59 回大会 2017 年 10 月 29 日 東京大学(東京都文京区)

5. 内記 理 2017 「ガンダーラ彫刻からみた仏教画像の段階的な伝播について」第 50 回南アジア研究集会シンポジウム “The Himalayas on the Move.” 2017 年 7 月 29 日 愛知県知多郡

6. Satoshi NAIKI 2016 ‘Four Gandharan Sculptures with Inscriptions Including Dates.’ The Second Oriental Renaissance, 2016 年 12 月 4 日 中国人民大学艺术学院(中国北京市)

7. Satoshi NAIKI 2016 ‘The Chronological Order of the Gandharan

Sculptures with Inscriptions Including Dates.’ The 23rd Conference of European Association for South Asian Archaeology and Art, 2016 年 7 月 6 日 Cardiff University, Cardiff, United Kingdom.

8. Satoshi NAIKI 2015 ‘The Arm Joints on Gandharan Sculptures.’ International Workshop on Pre-Modern Kashmir 2015, 2015 年 9 月 24 日 京都大学(京都府京都市)

9. 内記 理 2015 「チャナカ・デリー遺跡の検討」日本オリエント学会第 57 回大会 2016 年 10 月 18 日 北海道大学(北海道札幌市)

10. Satoshi NAIKI 2015 ‘Research on Sculptures in Gandhara from a Technical Perspective.’ The 2nd Kyoto-Bordeaux Symposium 2015, 2015 年 5 月 22 日 京都大学(京都府京都市)

11. Satoshi NAIKI 2014 ‘The Transition of the Style of Gandharan Sculptures in the 3rd Century CE.’ The 22nd Conference of European Association for South Asian Archaeology and Art, 2014 年 7 月 3 日 Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm, Sweden.

[図書](計 2 件)

1. [責任編集] 宮治昭、[執筆] 内記理(ほか省略、総 19 名) 2017 『アジア仏教美術論集 中央アジア I ガンダーラ～東西トルキスタン』中央公論美術出版、総 591 頁(うち 27 頁を執筆。57～83 頁)

2. 内記 理 2016 『ガンダーラ彫刻と仏教』プリミエコレクション 66 京都大学学術出版会 総 289 頁

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内記 理 (Satoshi NAIKI)
京都大学文化財総合研究センター・助教
研究者番号：90726233

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()